愛宕サマの焼観音

それはいつ頃のことなのか、今から二、三百年も前のことだろうと人々はいっていた。

或る年、五幸山一帯が大きな山火事になったという。その山火事も二度程あったと昔からいい伝えられてきている。この山火事のとき、御山のお使いである大蛇が太い尻尾をふって鐘をつき、里の人達に大火を知らせたという。雪の降る夜炉ばたを囲み、よく古老からこの話しを聞かされてきた。

火の手が上って間もなく、山一面はたちまち火の海となってしまった。そのときであった。長く尾を引いて一つの大きな火の玉が五幸山から東の方をむいて飛んできた。山火事を見ていた里の人達は「御山の火事で大きな火の玉が飛んだぞう」と大さわぎになった。そして「これは何か悪い知らせではねいのか」などと口から口に伝わって、里人達を恐怖のどん底に落し入れてしまった。

その玉が、どうも愛宕さまあたりで消えたらしいということで、その日の翌日元気な里の若者達が、オッカナビックリ恐る恐る愛宕山さして登っていったのである。頂上はいつもと同じように静まり返り、松風のみがヒューヒューとなっているのみであった。ところがお宮の片隅にある小さな、なかば傾きかけた行屋のお灯明台を見て一同はアッと驚きの声を上げたのである。なんとそこには、木像の下半分が焼けこげた観音様が一体あるではありませんか。そしてその傍の大石の横にある松の大木の根元には、飛んできたときに突き当ったと思われる子供の頭ほどの窪みができておりました。里の人々は「そうだ、ゆんべの御山の火事に飛んで来た火の玉は、確かにこの観音様だべ、火事であんまり熱いもんで逃げ飛んで来たんだべ。これは